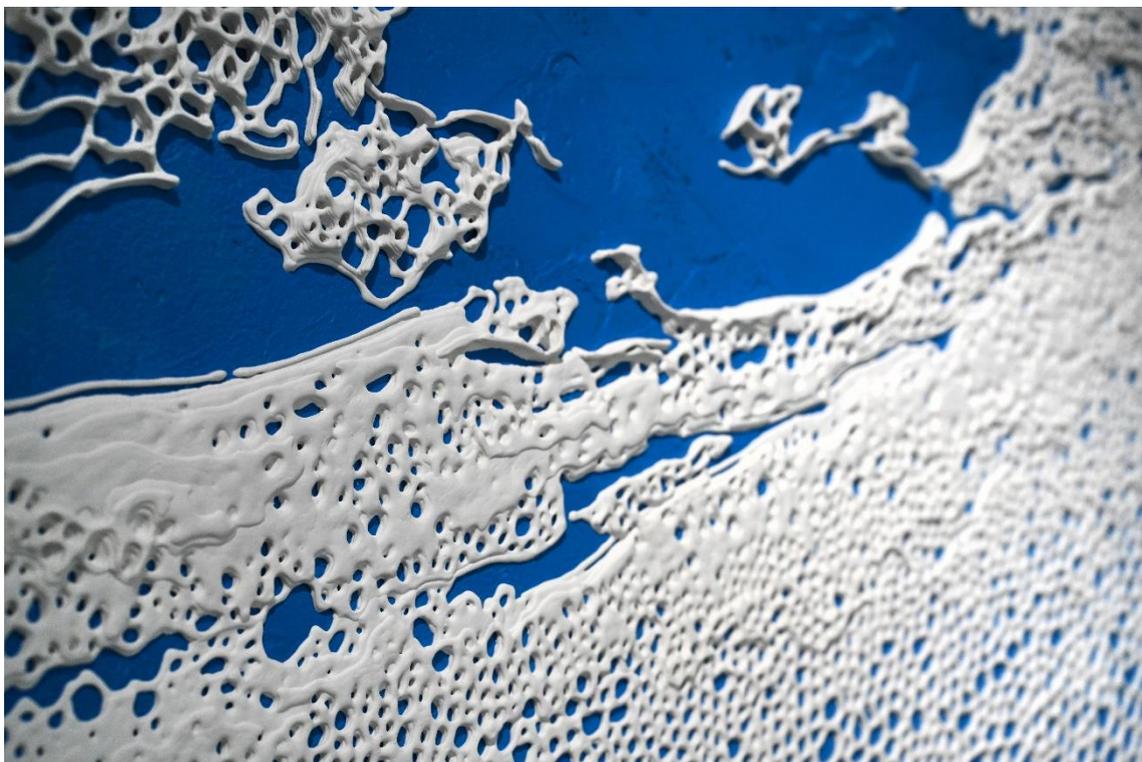


## PRESS RELEASE

### 能登と artists

能登とともにある、アーティストの思考と行動

2026年3月7日(土)～4月2日(木)



山本基《時の積層》(2025年)

2024年1月1日の能登半島地震から2年が経った。能登の復興は進んでいるとはまだ言い難い。その一方で、能登へ思いを寄せる人たちが能登を訪れ、それぞれに活動し始めている。静かだった能登に多様な人たちが集まり、能登の人たちとともに誰も想像していなかった未来へ向かおうとしている。本展には、能登の「これから」に希望を抱き、一歩ずつ復興へと進んでいくことへの願いを込めた。

本展を構成するのは、石川に暮らす10組に、石川出身の前本彰子を加えた11組のアーティストたちである。いずれも能登で活動する作家、能登への思いを作品にする作家たちである。なかには自宅が倒壊し、住む家を失った作家もいる。展示する作品のなかには、被災し、もとの形ではなくなった作品もある。しかし、アーティストたちはそこに意味を見出し、新たな作品として再構築する。そうしたアーティストたちの思考と行動が、能登の復興への大きな力となるのではないだろうか。能登への思いをつくること、そして多くの方に本展を見ていただき、感じることに繋いでいきたい。それぞれのアーティストたちとともに、能登復興へ思いを改めて寄せていただけたら嬉しい。

(キュレーター 高橋律子)

#### 【出品作家】

石川幸史、仮( )-karikakko-、金沢21世紀歌劇団+VOX OF JOY、金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム[スズプロ]、高橋治希、高橋稜、前本彰子、眞壁陸二、モンデンエミコ、山本優美、山本基

## ◆能登のこれからを考える5つのキーワード

### 「芽吹く」「重ねる」「変わる」「祈る」「歩む」

本展は5つのキーワード、「芽吹く」「重ねる」「変わる」「祈る」「歩む」から構成します。この5つのキーワードに沿う形で、能登半島地震からゆるやかに進む復興の歩みのなかで、アーティストたちがどのように思考し、作品にしてきたかを紹介していきます。

#### 〈5つのキーワード〉

##### 0. 揺れる

##### 1. 芽吹く

また、草花は芽吹き、虫たちは這い、飛び回る。

##### 2. 重ねる

人と人がつながり、時間が積み重なり、今、ここに、この時間がある。

その先の時間も綴られ、重ねられていく。

##### 3. 変わる

失うこと、形を変えること、変わっていくこと。変わっていくことをおそれずにいたい。

##### 4. 祈る

誰もができるささやかな、祈るということ。時には一人静かに、

時にはみんなで声をあわせ歌ってもいい。

##### 5. 歩む

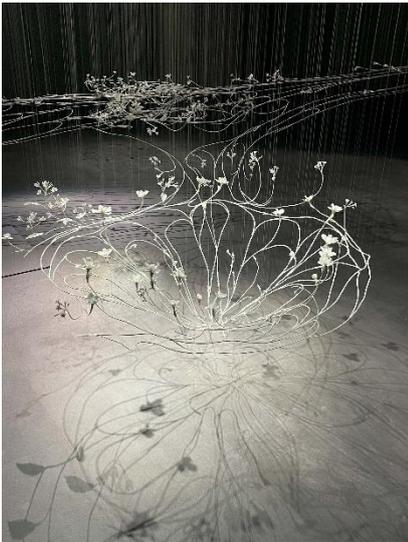
とぼとぼと、とにかく歩いていく。その先に、何かがあると信じて、共に歩いていきたい。

## ◆それぞれのアーティストの能登への思いを感じる展覧会

5つのテーマと交差しながら、それぞれのアーティストの繊細な思いを、作品を通じて紹介します。

### 自然とともに

地震で能登の風景は一変しました。けれども、震災後の春を迎えた能登では、いつもの年と変わらず、花が芽吹き、虫たちが飛び回っていました。高橋治希の新作は、能登の里山里海に咲く草花を癒しとともに描きだします。写真家、石川幸史は、震災以前から能登の海岸を撮影してきましたが、震災後も積極的に能登の海岸を撮影しています。大きな自然の営みのなかにある私たちの存在を浮き彫りにします。地震があっても変わらない能登があり、ささやかな日常の積み重ねの先に創造的復興があり、誰もが能登のために思いを寄せることができる。能登の自然とともにある日常。それこそが力になると考えています。

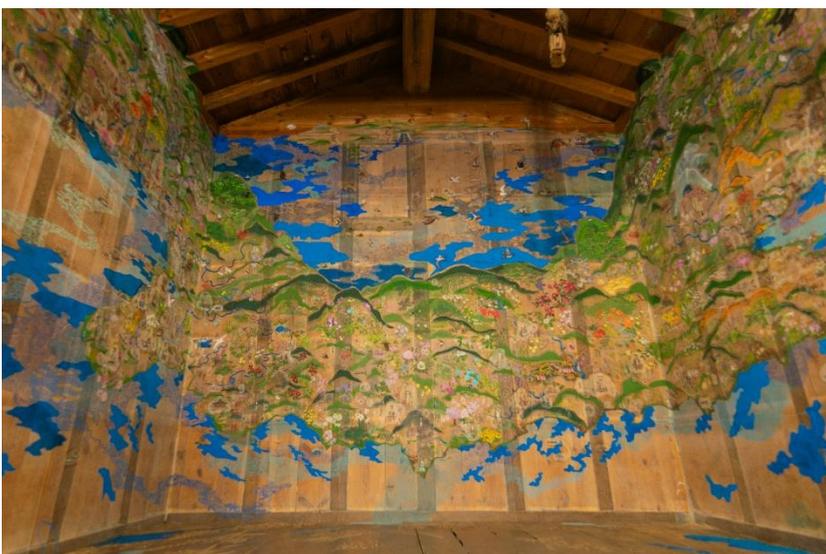


左：高橋治希《伏流水の庭》（2023年）

右：石川幸史 シリーズ「汀の光、時の轍 能登」より（2024年）

### 被災した作品、被災からの展開

奥能登地震では、作品も被災しています。本展では、金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム[スズプロ]《奥能登曼荼羅》（2017年）と山本優美《わたしのひふはおもたい》（2021年）の被災した2つの作品を展示します。《奥能登曼荼羅》は、当時の制作メンバーが立ち上がり、作品の修復と再設置に向けたプロジェクトとして動き出しました。能登に暮らす人々から聞き取った物語を描いた作品に、地震以降の物語が描き加えられるかもしれません。山本優美《わたしのひふはおもたい》は、揺れで倒れ、3つに分かれてしまったけれども、横たわり、見えなかった「ひふ」の内側がさらされることで、自分だけでは抗うことのできない多くの感情や思考を滲ませる作品となっています。被害を伝えるための展示ではなく、地震を経て、作品にはさらに思いが込められ、複雑で豊かなメッセージを伝えてくれます。被災した作品を単に修復するのではなく、作品の意義を見つめながら、新たな作品としての使命を与えるアーティストの制作は、わたしたちに勇気を与えてくれるに違いありません。



左：金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム[スズプロ]《奥能登曼荼羅》（2017年）

右：山本優美《わたしのひふはおもたい》（2021年）

## 日常のなかにある震災

地震はある日突然起こりました。その前にも、その後にも日常があり、連続する日々のなかに地震があります。地震の日を境に能登の日常は一変し、その一方で、能登から遠く離れて暮らす人たちの日常からは薄れつつあるのかもしれませんが、けれども、アーティストの作品が、地震は日常の一片であることを思い出させてくれます。高橋稜《あの日みたもの》(2024年)は石川から離れていた日に起きた地震をテレビのニュースで知ったときの思いを作品化し、記憶として刻み込んでいきます。仮(-)karikakko-は、珠洲で被災し、自宅を失いながらも、能登の人たちとともに復興へ歩いていく力強い日々が作品という形で綴られていきます。モンデンエミコは金沢での生活に追われながらも、時に能登に思いを馳せ、時に能登に足を運び、能登の人たちと対話する、リアルな毎日が刺繍日記という形で綴られています。アーティストたちのそれぞれの日常にある能登を作品という形で触れることで、その作品を見る私たちの日常にもまた能登が加わっていくはずです。復興の日々は、日常として積み重ねられながら、一步一步進んでいきます。この展覧会を見てくださる方の日常にも、能登への思いを重ねていただけたらと願っています。



左：高橋稜《あの日みたもの》(2024年)

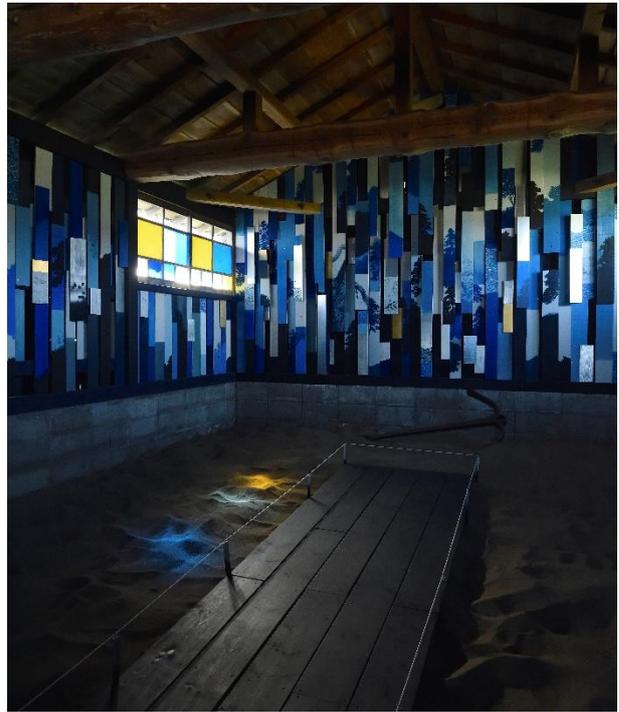
右：仮(-)karikakko-《仮(葬)-kari(sou)-》(2024年)

下：モンデンエミコ「刺繍日記」より(2025年)



## 能登への思いを作品にする

石川県出身の前本彰子は、東京で能登の地震のニュースを知った1時間後には、祈りを込めてこの《青の天使》(2024年)を制作していたと言います。ミュージカル「HOME~Grace for All~」(2025年)は、能登の方々の言葉をつなぎ、多くのアーティストや地域の方々が協働して生まれた作品です。いてもたってもいられない能登への思いをアーティストたちは作品にしています。山本基が奥能登国際芸術祭のために制作した《記憶への回廊》は倒壊し、塩の塔は瓦礫と化してしまいましたが、有志の方々がその塩を用いたアクセサリー作りのワークショップを各地で行うなど新たな展開を見せています。本展では、《記憶への回廊》(2020年-)と連なる作品を展示するとともに、被災した黒瓦に描いた作品等で構成します。震災後から能登への思いを作品に重ねてきた眞壁陸二は、奥能登国際芸術祭出品作《青い舟小屋》(2017年)を再構成し展示します。



左上：山本基《時の積層》(2025年)  
右上：眞壁陸二《青い舟小屋》(2017年)  
左下：金沢21世紀歌劇団+VOX OF JOY  
「HOME~Grace for All~」より(2025年)  
右下：前本彰子《青の天使》(2024年)

## ■出品作家

### □石川幸史（1978 年生まれ、岐阜県可児市出身、石川県金沢市在住）

石川幸史は愛媛大学を卒業後、東京総合写真専門学校で写真を学び、2005 年より本格的に写真家としての活動を開始。2018 年に東京都から金沢市へ拠点を移し活動している。石川の作品は、時間・自然・歴史の関係性をテーマにしており、地・水・火・風といったエレメントを通して、土地の風土や自然環境の変化を捉え、記憶や痕跡を可視化することを試みている。主な受賞歴は KG+Select ファイナリスト（2024 年）、代官山 Photo Fair Competition グランプリ（2017 年）、Japan Photo Award（2017 年）、Kawaba New-Nature Photo Award グランプリ（2015 年）など。近年は能登半島及び日本海沿岸地域を継続的に撮影しており、2024 年の能登半島地震後も現地を記録。2025 年には金沢市の Gallery Caring で個展「汀の光、時の轍 能登」を開催し、自然と人為の交差点を探る作品を発表している。本展では、自然の営みによる土地の隆起と沈降によって揺らぐ陸と海、人為と自然との境界に立ち現れる光景を捉えた複数の写真で構成する。

<https://koji-ishikawa.com/>

### □仮()-karikakko-

新谷 健太（1991 年生まれ、北海道出身、石川県珠洲市在住）

楓 大海（1991 年生まれ、岐阜県出身、石川県珠洲市在住）

新谷健太と楓大海によるアーティストユニット。金沢美術工芸大学卒業後、2017 年石川県珠洲市を拠点に仮()-karikakko-を結成。アーティスト活動に留まらず、2018 年ゲストハウス開業、2019 年一般社団法人仮かっこ設立。2020 年飲食機能をもつコミュニティスペース開業。2022 年教育支援系 NPO 法人ガクソーに参画。2023 年から珠洲市内の銭湯「海浜あみだ湯」の運営管理を珠洲で出会った仲間たちと行っている。土地に根付く歴史文化背景を紐解き、様々なモノ・コト・ヒトが交錯する環境(場所と状況)を生み出すプロジェクトを創出し、主体/客体が入り混じった場/況をケアし続けることで生まれた即興性と創造性によって、関係者の価値観の変容を促す。そんな仮に()で括られた環境に世界の複数性を見出すことをコンセプトに活動してきたが、能登半島地震で被災し、避難先で生活しながらも、珠洲の活動に一層力を尽くしている。本展では、個人の被災体験と地域の記憶を立体的に構築するインスタレーションを展開する。

<https://www.karikakko.jp/>

### □金沢 21 世紀<sup>ミュージカル</sup>歌劇団+VOX OF JOY

2023 年 5 月に発災した令和 6 年能登半島地震の際、VOX OF JOY は被災者と支援者から「地震を受けてあなたが 1 番シェアしたい言葉」を募り、その言葉から歌詞を紡ぎ「HOME~Grace for All~」を中田理恵子が作曲した。「HOME~Grace for All~」の曲は能登の復興ソングとして大きな広がりを見せ全国各地で歌われている。ミュージカル「HOME~Grace for All~」はこの楽曲をベースに中田を中心に制作した古代の能登を舞台として互いの違いを受け入れながら協働していくストーリーのオリジナルミュージカルで、金沢 21 世紀<sup>ミュージカル</sup>歌劇団の 10 代の子どもたちが演じた。能登復興というテーマのもと、本作の制作には演出・振付を劇団四季出身の松本和宜、脚本は長谷川晃示ほか、石川県に関わりのある多くのアーティストが関わったことが特徴的である。舞台美術を金沢在住のアーティスト高橋治希、プロダクト・デザイナーの餘久保優子、衣装は金沢で学生時代を過ごした舞台衣装家の川口知美がワークショップを実施した。展示では舞台美術および小道具等を展示しミュージカルを映像で公開する。

金沢 21 世紀歌劇団 <https://www.c-sqr.net/c/ktm>

VOX OF JOY <https://www.voxofjoy.com/>

## [HOME ~Grace for All~]

作詞：珠洲応援プロジェクト

補作詞・作曲：中田理恵子

Home Home Grace for All

Home Home Grace for All

足りないものはない ここは 特別な場所  
ここにしかない 恵み 守り 育てよう

自然の声聞こえるでしょう？  
耳すませ つながろう  
人の想い感じるでしょう？ 遠く遠く 海を越えて  
時を超えて 届くよ

Home 笑顔のあなたに Home 会えて嬉しくて  
踏み出す勇気くれる人  
想いをつないでいきたい

Home 空はつながってる Home 変わらず迎えてくれる  
一緒に超えて行こう 海と山と風と あなたと

捨てなきゃいけないもの 沢山あるけど  
少しずつ残して 懐かしむことができますように

どんな星の下に生まれたのか 誰も知らない  
同じ星の下に生まれた人と 共に 大きな光となって  
暗い夜道 照らしたい

Home 私に想いを Home 馳せてくれる人  
頑張り過ぎて 疲れた時は ひと休みして進めばいい

Home 空はつながっている Home 変わらず迎えてくれる  
一緒に超えて行こう 海と山と風と あなたと

海を背に立つ幸せの鐘  
祈り受け止め 鳴り渡る

ひとつひとつ重ねて やわやわと歩きたい  
ここが好きだから あなたの笑顔 守りたい

Home 空はつながっている Home 変わらず迎えてくれる  
一緒に超えて行こう 海と山と風と あなたと

Home 空はつながっている Home 変わらず迎えてくれる  
一緒に超えて行こう  
恵みの鈴の音が響くよ 響くよ

Home Home Grace for All...

#### □金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム[スズプロ]

《奥能登曼荼羅》は、金沢美術工芸大学の学生・教員の有志「スズプロ」が2017年の奥能登国際芸術祭のために1年をかけて制作した巨大壁画である。揚げ浜式塩田やキリコ祭りなど、地域の歴史と民俗を織り交ぜた壮大な構成を持ち、珠洲市の旧家の蔵の内部に描かれた。芸術祭終了後も常設展示され、市民や観光客に親しまれていたが、2023年の地震により蔵の一部が倒壊し、作品は撤去され、珠洲市内の海岸沿いの民家に分割・保管された。能登半島地震では津波の被害は免れたものの、倒壊した家屋のがれきの下敷きとなり損傷したが、有志メンバーの協力により救出された。現在、制作に関わった当時のメンバーが中心となり「奥能登曼荼羅再建部」を結成し修復と再建を進めている。本展覧会では被災した「奥能登曼荼羅」の板辺を修復し展示し、再設置への足掛かりとすることを目指している。

奥能登曼荼羅再建部 <https://www.okunoto-mandala.net/>

#### □高橋治希（1971年生まれ、石川県金沢市出身・在住）

東京藝術大学において油画を専攻し、土を用いたインスタレーションやフィールドワークを基にした風景表現を展開してきた。2002年に金沢へ戻り、九谷焼を用いたインスタレーションを開始。「庭」を東洋的なインスタレーションとして見立て、自然と思想を融合させ、すべて磁器で構成される空間を作り上げる。能登の創造的復興に思いを寄せ、被災地で植物をスケッチするプロジェクト等を行っている。本展では、能登の植物を想起しながら制作する新作インスタレーションを展示する。金沢美術工芸大学教員として《奥能登曼陀羅》の再建部メンバーに関わり、金沢21世紀歌劇団の活動にも参加している。 <https://harukitakahashi.com/>

#### □高橋稜（2002年神奈川県生まれ、石川県金沢市在住）

金沢美術工芸大学大学院工芸専攻在籍中の高橋稜は、染織を軸にした作品制作を展開する。グループ展等にも多数参加し、素材や技法の探求を深めながら、独自の表現を確立している。《あの日みたもの》は、普段石川で生活しているが、能登半島地震がおこったあの日、神奈川県の実家に帰省していて、テレビの緊急地震速報で地震の発生を知った高橋が、日々薄れていく震災の記憶と被災した人々を痛む気持ちを忘れないよう繋ぎ止めるために制作した羊毛フェルトの作品である。

Instagram @barbull\_works

### □前本彰子（1957 年生まれ、石川県白山市出身、東京都在住）

1980 年に京都精華大学短期大学部を卒業、1982 年に B セミ・School を修了。1983 年より銀座・コバヤシ画廊などで個展を多数開催する。社会的テーマを扱う作品を多く制作し、国内外で高い評価を得る。近年、前本の 80 年代・90 年代の作品への再評価が進み、東京都現代美術館などへの作品収蔵が進められている。また、羊毛フェルトとギャラリーを兼ねたスペース「ストロベリー・スーパーソニック」を運営し、アーティストランスペースとして多くの美術関係者が集う場となっている。前本の作品は、カラフルな色彩とポップな造形に目を奪われるが、根底にあるのは怒りと祈りである。自身の生活のなかにある怒りもあれば、ニュースで目にする戦禍にある人々の安寧を願う切なる祈りもある。石川県出身の前本は能登半島地震をニュースで知って動揺し、衝動的に《青の天使》を制作した。被災した人々への思いが溢れ、作品を作り、祈りを捧げる。本展では、《青の天使》を含む新作による祈りのインスタレーションを展開する。

<https://www.facebook.com/shoko.maemoto.9>

### □眞壁陸二（1971 年生まれ、石川県金沢市出身・在住）

多摩美術大学を卒業後、2000 年より画家として活動を開始し、2008 年より壁画の手法を用いたサイトスペシフィックアートとキャンバスペインティングを並行して制作する。国内外で展覧会を開催し、瀬戸内国際芸術祭などにも参加するなど、幅広い活動を展開している。石川県出身の眞壁は東日本大震災を機に地元へ戻り、奥能登国際芸術祭などで作品を発表してきた。2025 年に金沢市内のギャラリーで個展を予定していた眞壁は、能登半島地震を受け、「能登」へのオマージュをテーマとした。自然や営み、生死感、価値の多様さを内包し、断片的な矩形のコラージュを絵巻や屏風のように展開することで、再生への祈りを込める。本展では、2017 年奥能登国際芸術祭に出品された《青い舟小屋》の再構成した作品や、能登の記憶の風景を抽象的に描いた絵画作品を展示する。

<https://www.facebook.com/makaberikuji/>

### □モンデンエミコ（1979 年生まれ、愛知県出身、金沢市在住）

金沢美術工芸大学大学院彫刻専攻修了後、刺繍やコラージュ、モビールなどを用いて、日常の記憶や物語を可視化する作品を制作している。2017 年より「育児の始まりが創作の終わりにならない社会」を目指し、子育て中の女性アーティストが創作を続けられる環境づくりに取り組む NPO ひいなアクションのクリエイティブディレクターを務め、地域の子どもたちや市民と共に創造的な学びの場を多数企画・実施している。2021 年～2025 年まで金沢市民芸術村アート工房ディレクターとしても活動し、地域に根ざしたアートの可能性を広げている。金沢での生活に追われながらも、能登に思いを寄せ、ささやかな活動を継続的に行っている。10 年間、欠かすことなく制作されてきた毎日の刺繍日記から、地震後の日常を抜き出し展示することによって、地震後の日常を紡ぎ、展覧会を訪れた人々の日常のなかにそっと能登の記憶を残していく。

Instagram @monden.emiko

### □山本優美(1983 年生まれ、大阪府出身、金沢市在住)

金沢美術工芸大学を卒業後、ベルギー・ラ・カンブル美術大学にて陶芸を学び、現在は金沢を拠点に活動する。古着や古布の皺や質感を粘土に刻み、焼成によって「記憶メディア」としての性質を持たせる独自の手法で知られる。衣服に宿る記憶や時間の痕跡を、陶という永続性のある素材に置き換えることで、人間の存在や記憶の儚さを表現している。能登半島地震に際しては、長年親しんできた能登の風景が被災したことに心動かされ、復興支援を目的としたチャリティー展「co・能登と共に」(2024 年)の発起人として企画・開催に携わる。また被災した山本の作品《わたしのひふはおもたひ》(2021 年)は、倒れ、3つに分かれてしまったが、割れた作品をそのままの姿で提示することで、地震の記憶と共に、表層とは対照的な内部の土の物質感といった新たな側面を感じさせる作品となった。珠洲市大谷地区の災害流出土砂を用いて作品を制作するなど、地震以来、能登に心を寄せた制作を続けている。

<https://www.yamamotomasami.com/>

### □山本基 (1966 年生まれ、広島県尾道市出身、石川県金沢市在住)

金沢美術工芸大学を卒業後、塩を用いたインスタレーション作品を制作し、国内外で発表してきた。彼の作品は、亡き妹と妻への追悼をテーマに、塩で巨大な模様を描き、展示後に塩を海へ還す「海に還るプロジェクト」を実施することで知られている。金沢 21 世紀美術館、MoMA PS1、エルミタージュ美術館などで作品を発表し、独自の表現によって高い評価を得ている。2020 年奥能登国際芸術祭に出品されたインスタレーション作品《記憶への回廊》は、地震によって倒壊した。この作品を新たな形で残していくとともに、被災した作品の塩を用いたアクセサリー作りのワークショップが支援チームによって各地で実施されている。本展では、《記憶への回廊》から連なる青と白で構成された「迷宮」シリーズ、そして、能登で被災した瓦を素材として描いた《モノクローム - 記憶への回廊》(2025 年)、また、屋根等の地震被害もあった金沢市内の民家で保管されていた金屏風作品《時を纏う》(2022 年)を展示する。

<https://www.motoi-works.com/>

## 開催概要

展覧会名 能登と artists 能登とともにある、アーティストの思考と行動

会 期 2026年3月7日(土)～4月2日(木) 会期中無休

会 場 そごう美術館(横浜駅東口・そごう横浜店6階)

住 所 220-8510 神奈川県横浜市西区高島2-18-1 そごう横浜店6階  
045-465-5515 [美術館直通]

時 間 午前10時～午後8時 \*入館は閉館の30分前まで。

入館料 (税込)

一般1,400(1,200)円、大学・高校生1,200(1,000)円、中学生以下無料

\* ( )内は前売、公式オンラインチケットおよび[クラブ・オン/ミレニアムカード、クラブ・オン/ミレニアムアプリ]をご提示の方の料金です。

\*3月20日(金・祝)、21日(土)、22日(日)の3日間のみ、クラブ・オン/ミレニアムカード、クラブ・オン/ミレニアムアプリをご提示の方は無料でご入館いただけます。(無料ご招待3DAYS)

\*前売券は2月18日(水)から3月6日(金)まで公式オンラインチケットおよびそごう美術館にてお取り扱いしております。

\*障がい者手帳各種をお持ちの方、およびご同伴者1名さまは無料でご入館いただけます。

【そごう美術館公式サイト】<https://sogo-museum.jp/>

【X(旧Twitter)】<https://x.com/sogomuseum>

主 催 そごう美術館、神奈川新聞社

後 援 石川県、珠洲市教育委員会、北國新聞社、神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会、  
t v k (テレビ神奈川)、FMヨコハマ

特別協力 金沢美術工芸大学、奥能登国際芸術祭実行委員会、NPO ひいなアクション

協 賛 そごう・西武

\*ご入館前にそごう美術館ホームページおよび会場入口掲示の「ご入館の際のお願い」をご確認ください。

\*展覧会・イベントの中止や延期、一部内容が変更になる場合がございます。

\*最新情報は、そごう横浜店・そごう美術館ホームページをご確認ください。

\*館内では係員の指示に従っていただきますようお願いいたします。

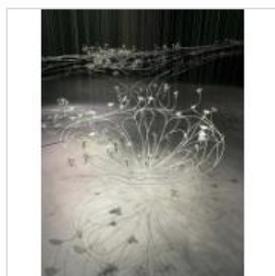
\*入館者が一定数を超えた場合には、入場制限を行います。(入場制限時、会場付近にはお待ちいただく場所はございません)

## 広報用画像一覧

☆広報用画像は、ARTPRにてお申し込みください。→ <https://www.artpr.jp/sogomuseum>



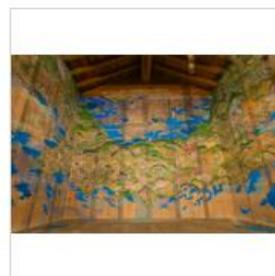
山本基《時の積層》部分 (2025年)



高橋治希《伏流水の庭》部分 (2023年)



石川幸史 シリーズ「汀の光、時の楳能登」より (2024年)



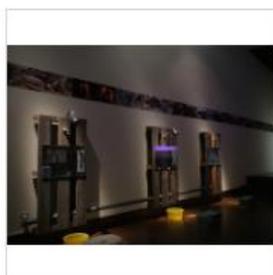
金沢美術工芸大学アートプロジェクト  
チーム【スズブロ】《奥能登豊茶室》部  
分 (2017年)



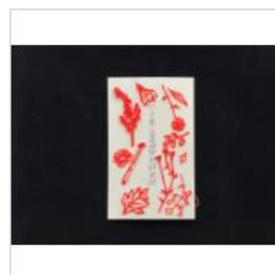
山本健夫《わたしのひふはおもたい》  
(2021年)



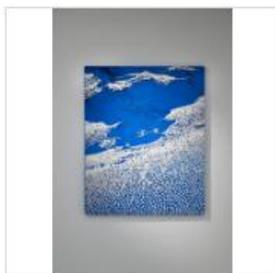
高橋健《あの日みたもの》(2024年)



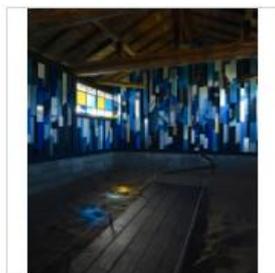
仮( )-karikakko-《仮(蘇)-  
kari(sou)-》(2024年)



モンデンエミコ「刺繍日記」より  
(2025年)



山本基《時の積層》(2025年)



真壁隆二《青い舟小屋》(2017年)



金沢21世紀歌劇団+VOX OF JOY  
ミュージカル「HOME~Grace for All  
~」より (2025年)



前本彰子《青の天使》(2024年)

本展の取材等につきましては、下記までご連絡ください。

ご取材いただいた際は、大変お手数ですが掲載紙1部をご送付くださいますようお願いいたします。

【お問い合わせ先：そごう美術館】 〒220-8510 神奈川県横浜市西区高島 2-18-1

Tel. 045-465-5515 / Fax. 045-465-2298

担当：三橋美季 ([miki-mitsuhashi@sogo-seibu.co.jp](mailto:miki-mitsuhashi@sogo-seibu.co.jp)) 三瓶裕之 ([hiroyuki-sanpei1sb@sogo-seibu.co.jp](mailto:hiroyuki-sanpei1sb@sogo-seibu.co.jp))